

あらず、油のへり料簡、すべし、燈のあかりにて爐中等見、程あらず、手燭出、或に不及、殊勝氣なきもの也、されども、亦まに、寄て爐中見、燈がたき時は、爐中改る時計、手燭出、まじ、二十種、初坐配合等、心用掛物、墨跡類は、大字あざや、成よし、筆者に寄、繪杯もよし、必と云には、あらず、曉會三ツかけの事、秘事口傳有。

〔茶道聞書集〕<sup>甲</sup>夜込に行燈置、料理出す時、手燭出すがよし、行燈引前にとるよし。

夜込に料理出すは、夜の明はなれたる時、行燈引、突揚も揚出すが一通り也、本文に書せるは又一體なり。

行燈引料理出す時は、汁は何、焼物は何と申すがよし、是はうそぐらき故也、時によるべし。

料理の調味、委細に客へことわる事、さも有べきことなり、○中略

夜込、夜の中は、宵の残の心持、薄茶の時も、極侘たる體にぼつとく立テ、夜明候ては、新しき心を持、少しさつはりと致し候がよし。

夜込、夜の内は、閑なる體、明はなれば、さらりと、客よりもつゞき、薄乞たるなど、心得有べし、夜明ては、兎角だれぬよりよしとぞ。

夜込の後の炭の時、底取候がよし、夜薄茶の前、酒煙草なども出し候がよし、是等は時の見合にあ

り、夜込の後の炭の時、底を取候がよしといふは、濃茶後の炭には、あらざるべし、初坐入して、埋火

などかきさがし、薄茶ゆるく、點、其後の炭に底など取てよし、○中略

夜込の爐中、下火あんばい六ヶ敷ものと覺々齋云、自方を夜込に呼候時は、下火半分ほど埋みあ

り、夜込の下火、前夜より留置たる釜なれば、心得工夫有べし、自方は家原氏なるべし。